

特集

# 奥久慈漆

岡農林振興課農林整備G ☎52-1111(内線204)

## 国宝重要文化財修繕で 需要の高い国産の漆

日本全国の国宝などの修繕のために毎年約2.2tの国産漆が必要とされています。しかし、供給される国産漆の量は令和3年の約2tを境に減少しており、不足しているのが現状です。その貴重な供給を支える地域の一つが、常陸大宮市を含む「奥久慈」という地域です。採れた漆は奥久慈漆生産組合を通して「奥久慈漆」の名で日本各地に出荷されています。

## 仕上げ向きな奥久慈漆

奥久慈漆は「乾きの速さ」と「透けの良さ」が特徴です。その特徴から、漆塗りの艶や美しさを決定づける仕上げの工程(上塗り)に向いているのだそうです。漆の質は土地の性質から影響を受けます。奥久慈の豊かな土地と、生産者や漆掻き職人たちの適正な管理のおかげで、漆に携わる人々からの信頼が厚い「奥久慈漆」の品質とブランドが保たれています。

## 漆は人間でいう「血液」

「漆」は傷つけられたウルシが修復しようとする樹液です。人間に例えると、切り傷ができたときに出る血液や滲出液のようなものです。これを利用して、植樹から約10年経ったウルシに傷をつけて樹液を採るのが「漆掻き」です。

また、漆を掻く数日前には、漆が出るよう刺激を与えるために3～5cmほどの傷を付けます。これにより、傷の付近に漆が集まって、効率的に掻くことができます。



▲漆の出る量を確認するために傷を付けた箇所には黒いかさぶたのようなものができています。

## 掻く時期によって性質が変わる漆

漆液は掻く時期によって性質が異なります。問屋から採れた時期を指定されることもありますが、多くは、性質の異なる漆を混ぜて、漆塗り職人が使いやすいように精製されるといいます。

**初辺**：6月～7月中旬に採取

最初に採れる樹液で、水分を多く含んでいます。そのため、乾きが速い性質を持ちます。

**盛辺**：7月中旬～9月中旬に採取

初辺の後に採れる樹液で、上塗りや黒・朱などの色を塗る漆に最も向いています。その性質から需要も高い漆です。

**遅辺**：9月中旬～10月下旬に採取

**裏目**：10月下旬～12月中旬に採取

遅辺以降に採れる樹液は、樹液の成分が濃いため乾きが遅く、接着力があります。その利点を生かし、蒔絵や螺鈿といった漆器への装飾、下地塗りに使われます。※傷をつけることを「辺」といいます。



▲漆掻きの始めは短い傷で刺激を与え、だんだんと傷の長さを伸ばしていきます。樹液を最後まで無駄なく採取できるような傷の付け方は漆掻き職人の腕の見せ所です。

## 漆は4日ごとに掻く

漆掻きは4日置きに行います。これは、一度に複数の傷をつけると木が弱ってしまい、漆が出なくなってしまうためです。逆に、傷を付けてから1週間以上が経ってしまうと、傷の付近に集まっていた漆が、修復の役目を終えたと認識し、木全体に散らばってしまいます。木を「生かさず、殺さず」、漆を掻くための日取りも漆掻きには重要な要素です。

## 漆を掻き終えると 木は生涯を終える(殺し掻き)

植樹から10年経ち、漆を掻き終えた木は、切り倒し、その役目を終えます。ただ、切り倒した後、切り株や根から新しい芽が出てくるため、その芽が成長すると、再び漆を掻くことができます(萌芽更新)。

## 漆の雑学コラム

### 「ウルシ」「漆」「うるし」 何が違う？

「ウルシ」と表すときは木そのものを指し、「漆」と表すときは樹液のことを指します。そして、木と樹液どちらも合わせて表現するときには、ひらがなで「うるし」と書きます。

### 奥久慈漆が生まれたのは 水戸光圀がきっかけ！？

江戸時代、水戸光圀が藩内各地の農民の副収入を増やそうとそれぞれの規模に応じてウルシを植えさせたと言われます。そこから、奥久慈にも生産が広まり、現在の「奥久慈漆」につながりました。

お話を伺ったのは……



神長 正則 さん

平成9年からウルシの苗木の生産を中心に奥久慈漆に携わり、過去には奥久慈漆生産組合長も務めた。現在は、苗木生産に加え、講演依頼を受け全国各地に出向いたり、自身が品種改良を行った通常の倍近い漆が採れる苗木の販売に向けて活動している。

ウルシ生産・木地作り・漆塗りの3団体が連携

## 奥久慈うるし振興会

奥久慈うるし振興会はウルシの生産に関わる「奥久慈漆生産組合」、漆を塗る器(木地)作りを中心に行う「優巧会」、漆塗りの技術を守る「YUS(山方漆ソサエティー)」の3つの団体で構成されています。一つの地域でウルシ生産から作品制作までを行うことは全国的にも珍しく、三位一体となって奥久慈漆を振興しています。

### 7月5日から漆塗り体験を開催します

YUS(山方漆ソサエティー)では、7月5日から11月2日までの全5回の漆塗り教室を開催します。詳細は5月26日発行のお知らせ版をご覧ください。



中村 保さん

活動中に  
得意を見つけて  
長く漆に関わりたい

## 神社仏閣巡りから漆の世界に

神社仏閣巡りが趣味の中村さん。知識を深めるなかで、漆が建造物の塗料として使われる以外に、乾漆造など漆によって成り立つ仏像の制作技法があることを知り、漆に興味を持ちました。さらに、1泊2日の漆に関する体験に参加し、漆に関わる人々との縁ができました。そこで、常陸大宮市の地域おこし協力隊募集の話聞き、応募を決めました。

## 漆に関する全てを学ぶ毎日

協力隊の活動として、苗植え、草刈り、剪定などの木の管理作業のほか、漆塗り前の表面を研磨する作業などを行い、奥久慈漆に関して総合的に学んでいます。「漆の管理だけでも覚えることが想像以上に多いと感じていますが、興味があるので大変さは感じません」と中村さんは話します。

## 目標は好きな奥久慈漆を生業として続けること

これから3年間の協力隊活動について中村さんは「1年目は奥久慈漆に関する流れを学びたいと考えています。2年目以降は、ミッションであるウルシの生産管理を軸にしながら、生産から塗りまでの奥久慈漆に関わる作業の中で自分の得意を見つけたいです」と話します。今後の人生、好きなもの



▲農機具を扱うのは初めての中村さん。重機を扱う仕事をしてきた経験から「操作は似ていますね」とすぐに慣れた様子でした。

のに関わる仕事を生業として、長く現役を続けたいという思いもあり、協力隊になったという中村さん。「退任後、漆に関わりながら、自分の生計も立てられるよう、漆に関する一連の作業で、自分が得意とするものを見つけていきたいです。得意を見つけることで、漆に長く携われるのではないかと考えています」と退任後の展望についても話してくれました。



▲「漆以外の素材に触れることも大切」との漆芸家の方の教で、漆塗り前の板材表面を膠と木粉で整える作業を行いました。

奥久慈漆の美しさや  
プロの仕事を守り伝えたい

## 市外でうるしを学び奥久慈に

約7年前、割れた食器などを漆で修復する金継ぎの習い事がきっかけで漆に興味を持った菅尾さん。うるしを学ぶなかで、奥久慈漆に携わる人々はうるしで生計を立てていることを知りました。うるしのみで生計を立てることは難しく、現地を見てみたいと思っていたところ、協力隊を募集していることを知り、応募を決めました。



▲育苗の作業では、ウルシの苗がしっかり根を張って育つよう、神長さんから土の被せ方を教わりました。



菅尾 浩美さん

## 奥久慈の「ウルシ」は美しい

奥久慈漆は塗りが美しいのはもちろん、木々そのものも美しいと菅尾さんは話します。「奥久慈漆の苗は、葉が青々として、健康さを感じられます。ウルシ林も左右前後に木々が整列していて、見た目だけでなく管理のしやすさが考えられていて感動しました」と市外でうるしに関わっていたからこそ感じた魅力を教えてくれました。



▲「雑草が茂るとウルシの根元の腐敗につながり、木が枯れることもあるんです」と下刈りの重要性を教えてくださいました。

## プロの教えは緊張の連続

協力隊として活動は、うるしに関するさまざまな工程を、それぞれ得意とするプロの指導のもと行っています。「教えてくださるのはうるしで生計を立てるプロばかり。実際の仕事に触れさせてもらっている中で、日々、緊張でいっぱいなんです。その分、新たな学びが多く新鮮です」と菅尾さんは話します。

## 奥久慈の漆のプロと各所をつないでいきたい

今後の活動について、菅尾さんは奥久慈漆の生産管理を学びながら、うるしのプロたちと市内外問わず各所をつなぐコーディネーター的な役割も担っていきたいといいます。「うるしのプロの皆さんは、高品質なものを相手に届けているかっこいい方々。奥久慈漆とそのプロの魅力を伝えていきたいです」と話しました。